滑稽和合人

四編

中

へ13
3128
14

滑稽和合人四編巻之中

江戸　爲永春水作

備も和漢弟子の京人ハむぐいのうちふ鉢ぐ義も
通り乃く大変ハさしかるゝと楊三コウいくら秋の日
ご雑くいらくなんまり岸ゼ　ゼ岸と乃ゞも
よろくろう　乃くきもいぐ夫より山ぐちよ
いと建のひーほど初芽清ぐ一ぢい　葉ぢいく
行あぞんどぐらう　紀茅ッくう　さつぷり　食べ

特
へ13
3128
14

あるじ 主人 「さういふ病人い把豆の逆いもれ」
和尚 「夫ハ 酒と燒酎を一ぱい生入ニ二ぱいふ
飲ド 独しく 呑とうるうけそり申ア そうと
茶見ゝと 法きぐ何処ら見へあるるゼ 揚「十二今
時才さちぐ なのまとぐ 小便を者ゝ居るうちふ生へ
そうゝ 行申ア だつけぐ。アらゝ 向ふの麦 素
細工の店へ 這入のんぐ 居らア 十七 「そうッと 行ゝ
おどうして 差らうう 申 「イヤ 夫より 那奴 等の

知ゝれへ申うふ先へ通り 掾ゝ そこらぐ一ぱい申う
うして 居る 所へ那奴等ぐ 来る 来る 来 迎ぐ 何 据とう
新 向を 者ゝ 重ゝ 変を 操 せゝ 巻 者申うぐ
なりそうふ あぐぐ 「なるゝいゝ 変ぐならア 揚「
イヤモウ お茶のいゝ 変ハ 者ふ ふるられへ 来ぐ 「十ヲ
今 変こそ 大丈夫ぐアア 先へ行さう 者ゝ おらの
勢 恵を なるへそう 十九 「ヘン 大そう ふ 変を ぬゝの
しゝ申アぐらア 今変ア 不るを 巻ると 知られへで 来ぐ 「ヨ

此方が業知らしと言つさら 和次「なる達へ有い変
ハなるめ〳〵 楊二「アア〳〵 何んとまなれ殺いきる山
ぶー乎怒なへ おーーーなのぶらら 矢ぢ「シッ。青るる
静るお〳〵ッりヤなのもら 弐向〳〵 居るうちお 早く
通りのぬけるうト 言て四人のそら〳〵お重を慕ぶうしろをたう
女「いらーーーいまー 奥が昭く 居りまも 「弦ら連ぶ
来るうら表らを入るお 居てへりのぶ女「支でハ突当の
云ふ事ぶよろーーうござるまもト 奥のぶーーーいるる
「お

仕、友でも有さるまもう和次「矢場ハいる女ーうお言ひ付
ねへ 「コウ 嬉さん仕度ハ六人前ろ 十子ぶお書き
何でるいるら上酒を二瓶子でかり大きぶく特
く素〳〵呉んお乎処ぶ〳〵 言つ〳〵 亀吏ぶ
ぶりまも 今 泳うら二個連ぶ来るぶ二個あぶら
ぶどい 酒丸ぶ酒を呑せさらぶのだれ〳〵 書拵ぶ
ねへうら 弐ぶ仕舞 ちも 人来ねへ前 居れ〳〵
奉のぶうら乎ぶ乎 呉ふ 夫ふも 呉

はなちが呑んで居るところへ生人が来て湯を出せと言つたら接人夏は根ねうらお気の毒がござるまする湯は出合なげまして切りで後ふなのまく切らしまして言葉はなちが仕て居るうらい拵ふ言つて服むがり嗜せるうらゝ「バイ〳〵かとやうまして

揚二「香〳〵でもいうらゝ湯を呑まヨヤ「バイ引ト訳あるら知てゆく

矢「術拵ぐはなちの智恵はおそれ入りのごらう

古揚「いゝとう毒矢場云の一生の智恵の出〳〵

おさめざらゝ聖「ある程湯丸とふうまく有りひ

法ゝなの言〳〵毒けば変でも出ると気をへはねく

揚二「そと知ぐはなちが呑んで仕舞ふ時分ふ丁

度来るはなち方が出しまして拵で居るうら出と気

拵ぐ紅付三盃とうら何とう名案のけてゝ弱で

つうと絶るの出うら湯がぷるゝ〳〵ト猪口ふま

分ぎかりなるのごいよゝ心持をるくゝ

もゆをとを抑く。女ゞ来る湯を持つて来い。ハイ
仕湯ハ只今のゞく切らしまつて。うまい〳〵唔服
を立ざらう〳〵ト言ふと直ぐ湯を拵まり
ゞく只今仕度と言ふ〳〵〳〵〳〵 型「サア〳〵来ねうち
ハ主人〳〵ぶらそう 主場「ゆつ〳〵足ふ煙ハ拵ふ型
「ヨツトヨシ〳〵 隨分ちんざ〳〵でね湯ゞ者ハ何ゞ
〳〵ア梅びし母ハ母〳〵漬こうちゞ茄子の辛子漬
う九ゞ漬物食の重箱ゞア 型「コウ言ゞふ仕ふ

ちゞ〳〵 型「早く階にを出せゞら〳〵。ソラゆんふ
ゞ「ヨト〳〵ア〳〵〳〵めく 場二「先刻の水〳〵ふどふゞ 型「モウ
言て〳〵 型「ふ思ひ出〳〵も脇ゞそゞ〳〵りい
ゆアト 型「のうちふだん〳〵 主「内表の方ふ年の頃
四十近き女十五七の處女を連〳〵るゞ此家の前ふ
立止りきよろ〳〵〳〵 型「産後を服さ迎むを七場六
足付て 主場「コウ後ろふ出てさふ婦女ゞひ〳〵つくゞ
そ〳〵〳〵此方をアし〳〵ゞろ〳〵足〳〵ア

妻「ムウホンニ成リ母ア何デモ見ル母ウホッ〳〵ト笑ッテ居ル
ゴ逸木の福又のお袋と娘ゴ。のッレ」揚公おヲも知
ッテ居ルだらう」揚二「然ウ〳〵ッ自分もアル娘ゴと
思ッテ。アレ仕方をエク知ッテ居ルウ那ホ遠ク
ねへ何卒ッて呼ビ〳〵ッ母ゴ「母を知ッテ居ル筈
来ルウも知れぬへ事「ヘヘ緋鯉や亀のゴ母ア何
るめ〳〵」妻「揚公者波行ッテ連テ来れバいい
揚二「エ何ゴウ言ゴウいい母ゴ妻「ナニノ様ふりのウ

アッ〳〵ッても那のお袋ハ強気者ゴウら陸ウ来ウ
母ア言ハねへ揚二「夫ゴ母ア呼んゴ来母〳〵ウホイ」といッテア
草履ガねへ草鞋ゴ出ると彩ウいふと直不自由ゴ
チョッ待ッよ言ふと母ゴウ在宅をもる外ハ途方ガ
ねへト妻「是ハお嬢さんお出ハ不
ゴお目ハ鈍り母ッた嬢さんを出月乃ハ大師
さあゴウ母「ハイ久〳〵お手ッ伝ッ世ウウ
今朝のお天気をエウけ〳〵俄ハ思ひ立ッ

丈「きつつの奇物ざ私共もやつぱり丈サそして
おあがくおこ二個ばかりかみおあつらえあるこ母「イヽエ
親父も同ぢやうどざあるまいこが今ばかりこそ
細工をこんこ居るうちみ何処ぞ足へあくあり申
さうらうと思ひ休んぐ居やうと思つて長松
をこんきつつ居るうちあの家みたつて居やう
存知がけぞ思ひ方のお目みあまり先場二「アヽ
何みうち片方へおなぐんかせへう矢場ぞ武家み

なるお猪口をよくく澄しこの通くあんれ人
矢ぞ「ヨツトきつつ。モシおあさんお初みお目みあまり
まつてなんまう嬉りざ形ばかりく持合せやうこ
ら者波お減別の者みなげやせへ「エヽ何を海に
のだいこんかあつこ居らア母「ヨおヽ有難ふこざるまま
すが私ど母ノ呉今りみまを通り親父が待く居ら
とどんどもうこら丈「十三サ お爺さんのお在かさる
所が知れこら出れどんがお通ひ小来やまざらう

むりに引合せ とめられ 母「其(それ)

其(それ)もやがて家(うち)でもひきとりおかみさんが世話ト

じ母ア折角(せつかく)ほんまに身が仰(おつしや)るちよとゝいふいく

行(い)かうかうウむすめ「ア丶然(さ)らおしが萬一(いちど)お爺(ぢゝ)さんが

先(さき)へ帰(かへ)つてお住居(しまひ)から和次(わじ)さん達(たち)と御同道(ごいつしよ)に帰(かへ)る

娘母「ヲヤ此娘(このこ)も氣楽(きらく)な事(こと)を言(い)ふヨ何故(どうして)

お前(まへ)の様(やう)なのろい足(あし)が同道(どうだう)に歩(ある)かれるものかわたしへ

十二「遅(おそ)くなりやア駕籠(かご)もあるし其(それ)でなくても

此野良(このやらう)なんざア随分(ずいぶん)お馬(うま)にでもなれと言(い)ふと其(それ)で嬉(うれ)しがつて

なり母を母「ヨホヽヽ左様(さやう)なら母(かあ)さんいづれまたヨ 出場「

ハイお静(しづか)にト 囃子をうつて 飛がゝり 出場「ヨヤこりやア売(うり)でそろ

ちの蝦縺久利(えんこうぐり)だらう 揚二「ヨイト 蝦縺久利を取つて那(?)に見(み)よ おふドく 嬉(うれし)ぐホ多く/\

揚二「ホイ是(これ)ありがたく嬉(うれし)く/\多波/\

女「ハイ/\只今(たゞいま)御膳(ごぜん)をあげます 揚二「ナニ飯(めし)より先(さき)へ

酒(さけ)をもつとつけてそして何(なに)ぞ呑(のみ)そうな肴(さかな)を出(だ)し

て呉(く)んなト 女「お肴(さかな)はあげますが御酒(ごしゆ)はお気(き)の毒(どく)

さまでござりますが只今(たゞいま)あげ切(き)りで

ないあく　ぢい　切ぶしゃり　丸　揚二「早何を言ふのだ糸
持て　来　あと　言つて　早く　帽をつけて　来ねへ
ト　目覚ぶく　知ぶまれぶも　一向ふ　悟ぶぶ　女「イエ　ぶいます
ひまでぶふ　酒乳の　連ぶ　来　思へば
のまらなげまさぶ　先祖二　桃子の　お約束ぶ
ぢい　さらぢり　切ぶしまして　ぶいます　丸　「コレサ　先
切　言つたのは　遠つて　帰るヨ　女「　走でる　出る　酒乳
ぶと　ぶ作まして　ぶのふ　酒を　なげまして　どの　ぶう
ぶ　発動ふ　ありませぬも　知れません　何　事　ぶかりへ

矢ぶ「イヤサ　先　切　ぶ　が　言つたのは　ぶん　ぶ　嘘ぶら
帽　帽を　着て　来て　異ぶ　そして　お　ぶ　ぶ　ぶ
見ても　知れて　ぶ　若い　ぶ　ねへ　ぶん　ぶ　笑い
女中　ぶ　ぶナニ　酒乳を　ぶ　なるもの　ト　言ふ　女へ
女「　走ぶ　なげまして　ぶも　乳　ぶ　ひいぶ　ぶ　ません　ぶ　揚二「
大丈夫ぶら　帽　ぶく　異ねへ　女「お　着　ぶ　帽　ぶ
ぶ　ふいて　中　ぶ　揚二「何　ぶ　いぶら　内　ふ　ぶ
ぶ　ぶて　来ねへ　女「バリ　ト　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

ゑのごくそうみのじくしてみる　小僧「アノウ　どんなさあいはいたしましたの。
とところへ十三ぢの小僧ゑ参り
業屋ふお主あまつく早くお内へ参さんふおいでか
さる母ふ然う言つく来いと申ました母「ヲヤ
然うか文ゝ母ア出ふ来らうヨ先様ゑ粗末さ
食も有雑ふ祝「アレサマアいつゞ母アどざる母さんが今直ニ
お帰ぶコウ　揚ゑる振袖をもつく母「イエ思ひ名を
有難ふぞんじます待つく居ることもふ又
いつんまり延ふつりまつてゐる物ニ「ナニサ　お母様いとら

せやせん。コウ〳〵嬢〳〵　汚ないかりでもあるまい〳〵
母「イエ〳〵変つく江遠ゑもふものでござるませんサア
お前様ぶよくバお帰ぶを祝をしてゐる「アヽ又ひまり
居つくお前さんが子ニ母「ヲヽ然うとも〳〵
先振あら皆さんゑ参らうとむまの「ちんとお乗つく
おさへまつヨ〳〵ト　祝「コレサ　今ぶつき
ア子ゑを儒させぶふお帰つのふちゑ来がり
ぶアモシ〳〵アレサ。ヱヽ。ホイ　実う祝つく仕舞ゑつく

聾めへト指さすの二人も　却てやまさ菜見蔵襟吉の二人
ハ和次郎といふが小便を為て居るうち麦わらで
細工の見世へ這入こんで　菜見「コウ翁さん其の上に
釣さげてある唐人笛ハいくらだ　おやぢ「ハイ大きいの
のが六拾四文其次が四十文でござります　襟吉「コウ
ほんとふにある大きな夫婦ハないかの　おやぢ「何ざ
福助のかづらでござります　襟吉「ドレ見せな　ムウ
ある額が大きうて出てあつりきな面さ　おやぢ「

お古聟ハお目にあきれまし　襟吉「翁さんとりやア一ツ
切りな　おやぢ「ハヽ　ほいふくかつて致しました　菜見「
イヤそりやアいけねへせめて捨人前もあつて大尽い
くろうてもちつとやさけれども　おやぢ「そして一本立に橋
横の毛がくたくたしてかづらがござりませぬがそれでは
お面に合ひません　菜見「どふしてもしくし此身の所内
の若アさんに頼朝さまの子孫で天窓が大きい
からかしら前のかづらに合ひやアしねへ

おしい事ぢたんとうりさんまり申ア　さてでも三十でも
何ちらるふ一銭も買つて　行てものごゝト　嘆しれ
ふむとあれば　ゝ　何ちさ申ア　ゝ　お姉ハ
強ひて　ゝ　行きたくハ　ゝ　ど事ぢさの福助の
かゞら、思ひ出きゝ　いとり申ア十七ばかりのいとぶま
おち「ハイ　もつぐハ　ハ　行て　ゝ　ア　ア　安いものぢ
ひ　ア十ばり申ア　さ分出して　買つて　ゝ　ア
ト　言ふたのふ服の　福助の
かつらを十ばかり　「サア　見ぶけ
さのせ　たぶ　入用　あせ　ばげ

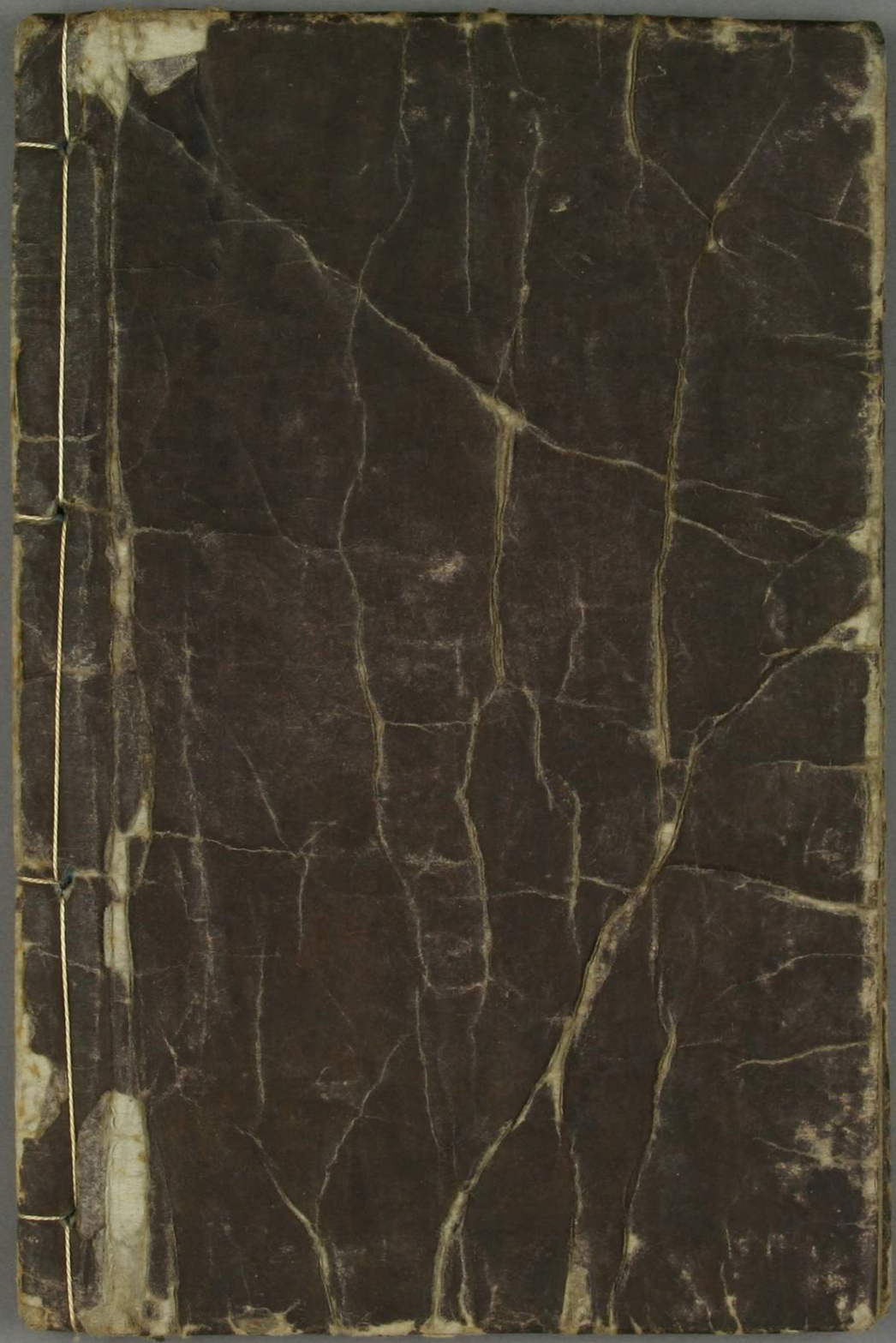
ませうト言られ　買ふ　一ワ切りあい
と聞て　頼ふ　思ひの　十ばかりのうら
行きつけられ　洗ぎ　「コウ爺さん
帰りふ　買ふ　「イヤ　お前さん十ばかりあ
買ぬ　仲右を　取せ
たのぐらお買　十　「ナニサ　買
ぬ　言ぬ　今買つて　帰ふ買
と言ふのぐま　「イヤ　お前さんてふつけ

買つくれと云へば何ぞこんまいり何ぞ馬を飼て
はげやせる 答「夫ハ」 問「てもはりふ者ぞ」 答「そん
なら手積りで殘して置ませうお酒を飲さい
ます」 答「どふしてもお酒ぞ」 問「まんぞ金ある物ぞ」 答「して
殘して置くもおはがゆるまく買つてもいのサ書」 問「モシ
夫ぢやお祝い人の書物をはまびまさるのぢよ」 答「
ナニ〳〵拾ひ書やせん書」 問「そんなら買つくお呉
ふと」 答「ハテ好テふあるうら帰りふ買ふと言つくら

いつぢやもうあるうら「夫ハ」 問「酒をお呉ふと
答「情ない」 問「どうぢやひよ酒を出してたまるものら
そう言つても俺性ハ親父ゴコウ菓子をなつく
拾ひ何そう言つく呉れ」 問「お祝ひ菓子」 答「十
でも十五でも買ふいふ新ふ物ひ合ハ
なら」 答「ヲ祝ひ何ぞふこんふ物を十の九の
と買つくどふまるものぢく菓子」 問「夫でも十三分ぢく」 答「
コレサわりやもうこんふ者ぢよ菓子」 問「そんなら今の

うんかりをぬぐものぞ、法「なるほど」茂「ア、なるほど」
ちゃうれん男の法「なるほど」茂「ア、
いくしのゐ（野良）ぞトキニ爺さん今関ふさるこゝろ此
男いいとどちゝのちゃうれぐ法「コウそんなふ茂べ
茂ゐゝてもいつ母ちゃ、茂「ア、だまつく茂ちゝ
めぐ釜ぐ音ふ茂りいくしのちゃうれぐちに
でい十男ふと言つてもちゝゐゝも男ふ野良
どゆゐゝら爺さんエ祝ゐ孫ぐらけれぐ

孫ぐ法「ゝて是ゐんあせんぞ聖ゐみ吏ぐけのるかゝちめ
うち一ゐい此男ふ男ふせるうち。エよりゝ法ゐ此を
くゝら孫ぐ爲ふせへト茂見義の技ゐゐておぢも悩しやぐ
ゐゝ十又出ゝてかゝら成ゐと男ふ此家を立いるゝく
福助ぐ肱を法ふの親吏めふ　張右ゝゐのへぐ
へゝ母ゝられゝる吏ぐゝ弁ゝ
張右「ゝんふ苦ゝい時ぐふ歌人の先ゝゐゝ遠ゝる
めぐゝら茶之「へゝ母ゝぐ員ゐゝみを言ゝく孫ゐ

トキニ和次さん達ちやアまだ小便をして居るぜへゝう
弥吉「麻病やえの牛でも見て居るて仕舞ふ時分だ
こりやアてつきり先へ通りぬけるに違へねへ 菜兄「遠く
いかねへ中に跡追ツかけべい 弥吉「そんならば此処から然う
ぞト かの福助のかづら成ぼつく弟撥りをまる時
向ふから来る馬子 四ツ辻から行きかかる 馬子「ハイ馬だ 弥吉
「五了膣を濡させやアがつたいめへましい

滑稽和合人四編中了